

曲亭馬琴「西遊記抄録」  
解題と翻刻（下）-付、『金毘羅船利生纜』馬琴自序-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/16492">http://hdl.handle.net/10291/16492</a>

## 曲亭馬琴「西遊記抄録」 解題と翻刻（下）

― 付、『金毘羅船利生纜』馬琴自序 ―

神 田 正 行

解題・略書誌・凡例は、前回（本誌四九二号掲載）参照。

解題を補うため、本稿の末尾に長編合巻『金毘羅船利生纜』（英泉画。文政七年～天保二年、甘泉堂刊）各編の馬琴自序を付載した。

### 《翻刻》（承前）

○卷ノ十 巾箱本不記巻数

第四十六回 外道弄強欺正法 心猿顕聖滅諸邪（14才）

その時三道士等、金鬘殿に在て恭しく訴ふ、「某等、廿【右傍「年」】来国土を保護す。しかるに陛下一場の雨を以、殺人の罪を許し給ふはいかにぞや」といふ。国王昏乱して又閔文をわたさず、「国師何を賭にして彼に勝ん」といふ。虎力、「坐禅くらべして勝ん」と云。王云、「坐禅はかれらが本行也。などでこれらのことをなすや」と云。虎力答て、

「某が坐禅はよのつねにあらず。五十張の卓子をかきかねてその上に坐し、一時の間身を動すことなし」【と】脱力云。国王則、行者に云云と云。行者、「坐禅を会得せず。われまけん」と云。唐僧、「わかゝりしとき坐禅を習ひ得たり。しかれども五十張の卓子の上に坐しがたし」と云。行者隱身の法を以、唐僧を援て卓上に坐せしめ、虎力とゞもに坐禅、終に勝負なし。「坐禅の弁、この下にあり」行者虱に化して虎力のえりにはひ、又臭虫と化して虎力の手をはひ、又蜈蚣の股入る。虎力これに堪ずして、とんぼかへりて地上に落。幸ひに衆人の資によりて死(14ウ)ならずといへども、【右傍「坐」】禅にまけて国王大に驚く。行者ひそかに師父を駝してをり来る。衆人の目には、唐僧みづからをりるごとく見えたり。そのとき鹿角、王に對ていふ、「虎力大仙は天風の旧病起りし故に坐禅にまけたり。某隔板猪枚の法を以て彼に勝ん」と云。王答云云。鹿云、「是則櫃の内へ物をおさめて、これをあてるの義也」。国王則、行者にその義を告て、娘々に寶貝を櫃内へ容しめ、兩人にあてしむ。角はやく猜して、【右傍「山河云云の」】寶貝也と云。行者法力を以、変じて螻蛄虫と成て、唐僧に教て、是則山河社稷襖、乾坤地理裙なれども、変じて蚕のつゞれといはしむ。則蓋をひらけば、変じてつゞれとなりぬ。国王大に驚き且怒る。此たびは国王御花園の桃子【を】脱力【とりて、藏之あてしむ。行者即桃の核子也といはしむ。国王不信、羊力は桃子といふ。蓋を開けば核子にして、皮肉なし。国王いよく驚て、「国師やめ。われ手づから桃子を藏めたるに核子となれり。彼にはかちがたからん」といふ。(15オ)虎力則一個の小童子を蔵めて、行者法力をもて櫃内にいたり、小道に諭して剃髪せしめ、もくぎよをもたしめ、「出るときに念仏を申せ」といふ。小道承引す。且仙氣を吹て道ふくを僧衣とす。則小和尚といふ。虎力肯せず、蓋を披けば、小和尚出て念仏す。虎力等も亦驚て、「是幻術也、武芸を比ん」といふ。且云、「某鍾南山にありしとき武芸を学得たり。三箇兄弟本事あり、首をきらせて首をつぎて不死、剖腹剜心忽痊、油鍋に煮られて恙なし。此法力を聞せん」と乞。行者聞て、「われいづれをもよくせん」と云。八戒聞て、「皆喪命の事不好」といかり、

行者笑て云云、則首をきらしむ。行者腔子中只叫ぶ、「頭来れ」。虎力咒文念じて、地祇をして首を守らしむ。那地祇、五雷法に依て、かれらに服事す。頭をとめてやらす。行者いらつて腹中大に叫べば、腹内より首出て元のごとし。人々大に驚て胆戦く。監斬官此よしを奏す。(15ウ) 唐僧、行者の恙なきを見て大に喜ぶ。国王則閔文を換んとす。行者云、「陛下、国師の首をきらして法術を試み給へ。さなくては最初のやくそくにたがふ」と云。王、この事を鹿力【「虎力」の誤】にいふ。虎力た【「や」脱力】すくうけひて、「御心やすかれ」と云て首を切しむ。行者毛を抜て黄犬と交じ、その首を銜て遠く捨つ。虎力首をよべども帰らず、遂にきり口より血出て死す。その死骸を見て老たる虎也。人々大に驚く。鹿角又王に請て、腹を剖藏府(マツ)を洗て死ざるの法を聞しめて、師兄の仇をかへさん」と云。行者聞て、「小和尚久しく烟火食をくらはす、腹中いたみをなせり。藏府を洗ふ事尤よし。但し縛手コとなかれ。われみづから洗ん」と云て腹を剖しめ、しばし洗ふて腹中へ納め、仙氣を瘡口(マツ)を合しめて恙なし。王大に驚て、閔文をかえんとす。行者又「鹿力にも腹を剖しめ給へ」といふ。鹿力(16才) 則腹を剖しむ。行者毛を抜、一隻の餓鷹と成て、五藏を携て遠く飛去。鹿力、腸を求めども不及、遂に死す。その死がいを見れば老たる鹿也。王又大に驚く。その時、羊力鍋うでの法術を比べて、二国師の仇を報せんと乞ふ。則大釜に油をわかして、行者に浴せしむ。行者云、「小和尚久しく洗滌せず。幸也」といふて、その釜に入れてにらる。はだかなりに手ぬぐひをもてあかをすり、はなうたをうたふ。人々又大に驚く。八戒これを見て、ふかく行者の本事に感伏す。行者たはぶれに、釜の中にてかたちをけしばかりにして見えずなりぬ。監斬官これを見て、「彼和尚、にえたゞれて釜中に死せり。但死がいとるけて骨もあらず」と云。唐僧大に哀みて回向す。受戒せしよりわれを保護して、云云。

八戒又回向、闖禍の澆猴子、無知的弼馬温。該死的澆猴子、油烹的弼馬温。猴兒了帳、馬温断根。(16ウ)  
行者聞之不忍、釜中に本形を見して八戒を罵る。唐僧大に喜ぶ。監斬官驚て、又云云と奏す。「これゆうれん(マツ)ならん」

といふ。行者大に怒て、監斬官をうちたふす。八戒おそれて、地にふして命を乞ふ。国王おそれて、走りかくれんとす。行者引とめて、「某実に不死。羊力をも又こゝろみ給へ」と云。羊力、衣服を脱して烹油の内に入る。行者隱身の法をもてさぐりみるに、その油つめたし。これ北海龍王こゝにありて、鍋底を冷すによつて也。行者、北海龍王をせむ。「五雷の法によつて已」ことを得ず。大聖ゆるし給へ」と云て、紅光と成て飛去。於是、油いたく煮て、羊力遂に鍋中に烹殺さる。その死がいを見れば、老たる【右傍「矜」】羊也。国王大になげく。

第四十七回 人身御供の篇也

聖僧夜阻通天水 金木垂慈【「慈」の誤】救小童（17才）

行者、国王に陳て云云。【右傍「黃虎・白鹿・玄羊の事」】王やうやく悟て先非を悔ひ、唐僧等をもてなして且僧を免し、招僧勝文を出して衆僧を招しむ。彼五百人の僧等、札を見て城に入來り、行者を奉拜して恩を謝す。王則智淵寺に至りて、唐僧を請て宴に赴しむ。和尚等行者を跪拜、齊天大聖云云と唱ふ。国王感謝にたへず、なほ数日留留せまく欲せしを、唐僧辞して関文を換、師弟四人、白馬を追て又西へ赴く。

一 通天河の段 三藏一行こゝに至て七ケ年、路程四万五千里。

第四十七回 聖僧夜阻通天水 金木垂慈救小童【▼この見出し重複】

師徒臨大河、不知其【右傍「寛狭」】。評議区々、行者乘雲遠見、猶不知幾百里。只見五六百里【耳】。三藏大驚、幸而近辺有莊院、宜止（17ウ）宿云云。唐僧先至莊院投宿事。【石碑、「通天河八百里、自古無克渡此者」】

一 この内に法事あり、念仏の声聞ゆ。主翁出て唐僧に迎ひ、「你福なし。一人に十文一升の施行、もはや出し終りし」といふ事。○唐僧云、「われは化齋のものにあらず。東土大唐云云、宿を乞ん為に來りし」といふ事。

主翁承引、行者等皆来る。主翁そのかたちの奇怪におそれて「有鬼々々」と叫ぶ事。唐僧、「かれらは云云」といふにより、わづかに心を得て坐しきに請する事。○その家の奴婢等も又驚く事。○主翁の弟出来て又驚く。妖怪にあらざるよしを聞て、衆皆安心の事。

頭書「一簇人 纒鏡」

一 行者、主翁に法事のよしを問。主翁【右傍「流」涙道、「是一場預修亡齋」。八戒道。行者、通天河石碑の事を問ふ。主翁答て「彼岸上に一座靈感大王廟あり。（この時外面の鉦鼓の音聞ゆ）又その故を問ふ。皆垂涙道、「靈感大王神靈灼然、よく禱祝するときは五こく豊登」。

行者道、「是着神」。皆道、「雖着神而所惑、贄童男女喫之」と云事。（18才）

【右傍「此処は車遅国の管内にて」主翁、姓名陳澄、六十五才。舍弟陳清、五十八才。陳澄兒女一秤金八歳。陳清兒女陳関保七歳（呼出して唐僧等にあはしむる事）。この童男女、本年輪番、この両兒にあたり。故に預法事を修すると云。行者聞て、「などて大金をもて貧人の子をかふて代りに出さざる」と云。陳老等云、答て、「彼大王折々影迎、その折香風あり。たれが家には子幾人といふ事迄よくしり給へり。依之、代のものを出す事かなはず。然らずは銀五十両をいださせ、代りの稚兒を求やすし」といふ事。

一 行者身をひねりて一秤金に交じ、「今夕われ代りて贄になるべし。命は運に任せん」といふ事。

一 陳清垂涙かなしみ請ふ。行者道、「米五六斗を炊き、八戒にくはせてたのめ」と云。八戒不肯、「われは竹木、或は木像などに変ずれども、小兒に変ずるは不得事也」といふ。唐僧・沙僧すゝめさとすにより、八戒陳関保に交ず。腹の似ざる処は行者氣を吹て補ひ、よくにさせし事。（18ウ）

一 行者、「贄はいかにして備るや」と問。陳老等答て、「只盤上にのせて廟内にしぼりからげず」と云。八戒、「童男

女の内、いづれを先に喫する」と問。「先年大胆のものありて伺ひしに、童女を先へ喫す」と答ふ。依之、八戒纒によろこぶ。

一 折から、莊客鉦鼓をならし来り迎ふ。▼以下、第四十八回「魔弄寒風飄大雪 僧思拜仏履層水」行者・八戒、盤にもられて廟に赴く。くさくさのそなへ物を持参する事。廟に到れば【右傍「祈祝して」】皆々歸去。八戒不安心にて行者に問。行者云、「彼怪来らばわれ問答せん。汝は多言する事なかれ」と云事。

一 深更に及て彼怪来る。廟門を半開して、「本年の贄は誰が子共ぞ」と問。行者答、云云。彼怪訝て思ふやう、「是迄の童男女は、わが問ふに一言も答得ず。二たび問へば、はや死したるものゝごとし。この童女大胆にて、且伶俐也。みだりに手を下しがたし」と思案して再答。行者答て云云。(19才)

彼怪弥疑ふて、「例年は童女より先へくらへ共、此たびは童男より先に喫ん」とて、八戒がほとりへ近く寄る。八戒大に罵て本形をあらはし、かくし持たるくま手をもつて、怪物の鼻へ引かけて引たふさんと。彼怪、はなをやぶられて大に驚き、空中へにげのぼる。行者も本形あらはし、追かけてとりまく。怪物、「汝は何物ぞ」と問ふ。行者答て、東土大唐云云。彼怪器械を帯ざる故に、逃て水中に没す。行者、かれは河中の妖怪なりと知て【右傍「八戒と、もに」】供物を携、陳家にかへり、供物を天井中におきてよしを告。唐僧・沙僧はいかに〜と思ひ居たり。皆々大に歎び、いよ〜あつくもてなす事。

一 彼怪、水府へかへりてたのします。水族等よしを問。彼怪【答】脱力【て、行者等の事を告ぐ。鰍婆すゝみ出、計を以唐僧をとり給へ」といふ。彼怪歎て、その計を問、「もし事ならば、汝を兄妹にせん」といふ事。

一 鰍婆、「雪をふらせ河水を氷らせ、夜水族を行人に変じさせ、数人氷上をわたらせて唐僧を誘ひ、渠がわたるとき、人馬の(19ウ)足音を聞かば氷を砕き、唐僧を没せしめて捉へ給へ」といふ事。

一 彼怪、その夜雪をふらす。唐僧等、明日大雪を見ておどろく。この時八月なれども、九月の節に入りし故、かくのごとし。唐僧道、「わが国はしからず」云云。主翁寒をふせぐの用意して、いよ／＼もてなす事。

一 夕方より人多く通天河の氷上をわたる風聞。主翁云、「かれら利の為に命を捨てわたる也。こゝにて百文のもの、かしこにては貳百文になる故」と云。唐僧も、「こよひ氷上をわたらん」といふ。沙僧留之、陳老等、「春氷の解るまで逗留し給へ」といふ。唐僧渡天の志急なる故に、人々の諫を聞かず。行者は只あざわらひのみ。この朝雪止む。

一 唐僧終に止らざる故に、陳老数百金をおくる。唐僧決して不受、陳老苦に請ふ。行者只一塊銀を受てその志に充つ。陳老三馬をいだして、みな河辺にいたり送之。是より馬をかへして、唐僧は馬上、八戒・沙僧左右に守護して氷上をわたす事。

頭書「八戒唐僧に誨て、馬上錫杖をよこたへて、氷やぶるゝともおちいらぬ用心の事」。(20才)

明朝に至りて、彼怪[河]中にあり、人馬の足音を聞て下より氷をくだき、師徒を沈しむ。行者ははやく飛上りて雪中にあり、八戒・沙僧・白馬みな水れんを得たる故に、踊あがりて出来る。行者唐僧を問ふ。八戒等、「唐僧水中に没してゆくへしれず」と云。行者、「これ彼怪物にとられし也」と云。三人馬を牽て、陳家にかへりてよしを告。陳老等大に驚く。

▼以下、第四十九回「三蔵有災沈水宅 観音救難現魚籃」

一 三人河辺に至りて談合、彼怪のすみかに至りて、唐僧をとりかへさんと云。このとき氷とけたり。行者は水れんを得ざる故に、沙僧駝せんと云。八戒思ふよしあれば、【右傍「好て」】行者を駝して共に水をわたる。行者その心を悟りて、毛を抜て仮行者を駝せしめ、その身は猪鬣と成て八戒のみ、の[中]にあり。八戒故意ころびて行者を投ぐ。もと是毛なる故に音もなし。八戒その身のちからにまかせて転びて起得ず。行者から／＼と笑ふ、沙僧も又笑ふ。八戒



大に怕れて(20ウ)わびて又行者を駈す。共に彼怪の樓に至り「百十数里あり」既に水なし、樓上有有(てつ)「水龍之第一」四ヶ大字。彼怪、鰻婆等と、もに唐僧を喫んといふ。行者等三人聞て門をたゞき、唐僧をなぐさめ、戦を求む。【20ウ頭書「行者道、【莫恨】脱】水災。経云、土乃五行之母、水乃五行之原。無土不生、無水不長】彼怪不出、行者を怕るゝならんとさつして、行者避水訣を捻着して、陸にかへりてこれをまつ。於是彼怪出て、八戒・沙僧とたゞかふ。兩人いつはりまけて誘引之。彼怪不追、水第にかへりて行者の事をいふ。むかし云云。八戒・沙僧、ふたゞび戦をいどめども、彼怪かたく門を閉て不出。兩人せんかたなく、陸にかへりて行者につぐ。行者聞て、「観音の資にあらずんば不能」と云て南海に赴く。善才童子紅孩児出むかふ。「菩薩は竹林中において細工をし給ふ」と云。行者聞て云云。菩薩魚藍をつくりて携來て行者に対面。行者水怪の事をつぐ。菩薩、「その故に魚藍を作りし」と云て、行者と、もに通天水に赴き、件の藍にひもをつけて水中に(21オ)おろし給へば、しばらくして金鱗魚藍に入て來れり。菩薩、「これわが池の金魚也。先に洪水のときながれ出、こゝにありて悪事をなせり」と云。八戒・沙僧、水第に至り、鰻婆を殺し、唐僧を扶出して同道。唐僧菩薩を拝謝す。行者菩薩の真影を陳老等に拝せんとて、その家につぐ。陳老一家皆來拜。そのうち画をよくするもの、ひそかに真影をうつす。今の世に伝る魚藍の觀音是也。菩薩遂に金魚を携て南海に飛去給ふ。

一 陳老等、船を準備せんといふ。そのとき水中に声あり、「行者の大便を報ん為、某師徒をわたさん」といふ。行者その故をとふに、金魚に水第を奪れたる大龍也。則出て岸による。行者もし悪心あるかと疑ひて、しばゞ質問す。決して悪心なきにより、師弟人馬龍甲上にのる。八百里の大河をまたゞくひま【に】脱力】わたし、岸にいたり師徒を拝し、わかれて水に入る。これより又、師徒西に赴く事。(21ウ)

## 第五十回 情乱性従因愛慾 神昏心動邁魔頭

唐僧等、又一座の高山を躡んとす。猛獸妖怪あらんことを怕れて、軽々しく不進、且行者を遣して化齋せしむ。そのとき行者、鉄棒をもて地上に画し、唐僧に誨て、「師徒皆この内にあるべし。これより外へ出て慢行せば禍あらん」といふ。又沙僧に、「師父を守るべし」と叮嚀に教誨して去る事。

一 行者、一村落到到て齋を乞ふ。主人何方より至りしと問ふ。渡天のよしを告。主人、みちのちがへるをもて詰之。行者云云といふ。しかれども、をしみて飯をあたへず。遂に門戸をとちて不出合。行者その吝を怒て、かたちを變じ、くりやに入て見るに、炊おろしの飯三升斗あり。則鉢にとり入れて本所に帰る事。(22才)

一 唐僧、久しく行者を待て不帰来。八戒坐牢の事を説て、「他へうつりて寒風をさけ給へ」といふ。唐僧、惑されてその窟内を出て山に登る。一座の堂宇を見る。八戒うちにくみ入るに人なし。おくに至れば鬻體多くあり、又卓上に錦綉の綿衣あり。八戒、「これをもて寒を凌ん」と云て、とり来て唐僧にすむ。唐僧盜偷戒のよしを説て不肯。又沙僧にすゝめて共に披之。兩人忽地この綿衣に縛られて転倒、はやく妖怪にしられ、人馬ひとしく擒となりて、怪物の面前に至る。妖怪、唐僧に綿衣を盗み【し】脱力【し】を責。唐僧答て云云。八戒等が事、且行者が化齋にゆきしよしを告る。八戒、又しきりに行者の本事を称揚す。妖怪冷笑て、三人にいましめて一室にこめおく事。

一 行者立かへり見るに唐僧をらず。「わが誨に従はず、山に登りしならん」と猜してたづねゆくとき、一箇の【老翁】等脱力【し】棒を杖つきて跡に跟つ、唐僧の妖怪にとられし事、又彼怪つねに殿宇をつくりいだし、人を誘ふてくらふことを(22ウ)を告之。行者謝之、老人忽本形をあら【は】脱力【し】、土神のよしを告。行者怒て、「さらば初より云云といはざる」と責む。土神こたへて、「大聖性急なれば、怒にふれんことをおそれてかくのごとし」とわぶ。行者盂盆の米を土神にわたして、「わが妖怪を退治するまであづかりおけ」といふ事。

彼妖怪在所 金峴山金峴洞 独角兕大王

一 行者彼洞に到て名のり、「唐僧をかへせ」と叫ぶ。小妖等、妖王に報知。妖王冷笑、許多の小妖を従へ、二丈余の鋼鎗を挟てあらはれ出【右傍】「て行者問答。遂に」まづ衆妖をして行者を撃しむ。行者、毛を抜てあまたの鉄棒となし、四角八面にあたりて衆妖をうちちらす。妖王冷笑着、袖中取出一個亮灼々白森々の圈子来、空を臨てなげかけ、一声さけば、一下、把金箍棒収做一条、套将去了。行者空手、翻筋斗逃了性命。那妖魔(23才)得勝回山洞、行者朦朧失主張。這正是、

道高一尺魔高丈、性乱情昏錯認家。可恨法身無坐位、當時行動念頭差。

畢竟不知怎麼結果、且聽下回分解。

右十回【「卷」の誤】畢。十一回【「卷」の誤】已下藏書にあり。藏本九・十両卷闕本也。故にこの段まで、巾箱本を借て略抄畢。

庚寅閏三月廿八日

七十五回 八丁左

大聖道、「我兒子、你不知事。老孫保唐僧取經、從広裡過帶了個折疊鍋兒、進來煮雜碎吃」、云云。三魔道、「哥々雜碎也罷」、云云。【頭書「雜碎」】(23ウ)

○古板卷十四 巾箱本不記卷数

第七十一回 行者假名降怪狐 觀音現像伏妖王

賽太歳闔了門戸於剥皮亭上、点聚群群妖提鈴鼓槌、更夜用心の事。

行者蒼蠅に變じて後宮に入る。金聖娘々啼泣。行者懇問、娘々驚疑。行者蒼蠅に變じ来りしよしを告。娘々猶未信、行者をり来りて娘々の掌内にをりて密談、娘々やうく信じて計を問ふ事。

行者道、「破除万事無過酒。酒をもて妖王を賺せ」といふ。依之、娘々衆婢をもて妖王を請ふて酒宴す。侍婢春嬌老狸狐、その中にあり。行者、ねむり虫【頭書「瞌睡虫」】をもて春嬌をねむらせ、その身かれに變（24才）じて酒席に侍り、酒宴之間、行者毛を抜て虱とし、或は【右傍「蛇虫」】臭虫となして妖王の衣服につく。妖王不堪、且愧て衣をぬぐ。肌につけたる寶貝出づ。娘々問、云云。仮春嬌、「衣服を更給ふ間、寶貝をあづからん」と云。妖王、一は虱に愧、一は心慌て真仮不認得、寶貝を取て仮春嬌にわたす。於是、行者毛を抜て仮寶貝を作り出し、この寶貝を窃む。妖王衣を更了るとき、仮春嬌寶貝は妖王に返上、妖王これを娘々にわたして堅固に蔵おかしむ。娘々雲情雨意あり、妖王、「縁なし。われ宮女等と別処に安寝せん」と云て、わかれて臥房に入る事。

一 行者、ねぶり虫をおさめ本形をあらはし、門外に出て「娘々をかへせ」と叫ぶ。天曉妖王覚来て姓名を問しむ。行者道、「我是朱紫国拜請来外公、取聖宮回国哩」。妖王、外公の義をしらず、これを娘々に問ふ、「朱紫国群臣中、外氏の人ありや」。娘々道、「『千字文』中（24ウ）外受傳訓、必是ならん」といふ。妖王、衆妖を将て外面に出て、「外公とは何ものぞ」と問。行者答云云。「われ朱紫国拜請之隆礼を受」云云。妖王、行者と闘て不勝、「われ未喫早飯喫了て又戦ん」といふ。行者その寶貝をとり来るならんと猜して允之。妖王うちに入て、娘々に彼寶貝を出さしむ。娘々患之といへども没奈何、遂に寶貝をわたす。妖王又門外に出て、金鈴児を揺て行者に見せしむ。行者その由来を問ふ。妖王答て、「太清仙境道縁深、八卦炉中久煉」云云。行者、「われも金鈴児あり」といふてその由来を称揚す。妖王疑て、三箇の金鈴児幌了三幌、不沙出、不火出、不煙出。妖王呆了、行者三鈴児をふれば沙出、煙出、火出妖王

を焼く。賽大歳脱去らんとするに路なし。そのとき観音影向、行者に諭して、「賽(25才)大歳はわが乗るところの金毛吼也。索子を断て走去来朱紫国、三年の災を消せし」といふ。行者、その故を問。観音答て、「朱紫国王太子たりし【時】脱力】殺生を好み、到落鳳坡前。西方仏母孔雀大明王菩薩所生二子雌雄、山坡下にありしを射て、雄孔雀を傷れり。その鳥則箭を帯て西方に帰る。仏母則折【折】の誤】鳳三年、身耽嗽疾しむるの時、わがこの孔聞て留心、故に來て騙了皇后。悟空われに願て業畜生を饒せ」といふ。行者承引、菩薩鈴を乞ふ。行者推辞、菩薩呪文を唱んと云。行者鈴を返上、菩薩吼に乗て飛去る事。

一 行者洞中の群妖をうち殺し、毛を抜て一条の草龍を作り出し、后を乗せて瞬間朱紫国城に帰て、よしを【有脱力】国王敏て、后を抱んとするに、身内疼痛して転倒、衆皆没奈何、折から半空中、張紫陽真人來向、行者に向て礼をなし、「われ三年前仙仏会に赴くとき、こゝを(25ウ)過りて、国王拆鳳の憂あらんことをしれり。妖の后を犯さんことおそれて、旧棕衣を變じて、五彩の霞裳となして后に授しむ。依之、后の身に【右傍「毒】刺【右傍「あり】】、妖犯さんとするに、その身疼て不能。今はその災消除せり、棕衣をとるべし」と云て、手をて指せば、棕衣脱下、真人これを取て飛去了。王后遙拜歡喜。行者、観音菩薩云云の事を告て、君臣称謝。唐僧得関文、告別国王。懇留すれども不溜、師徒四人、遂に辞し去る事。

第七十二回 盤絲洞七情迷【迷】の誤】本 濯垢泉八戒忘形

師徒又ゆきくゝて、一日一座の郵荘を見る。唐僧馬よりをりて路傍に休息す。みづから那首に到て化齋せんといふ。行者とゞむれどもきかず、(26才)八戒鉢盂を出してわたす。唐僧村莊に到る。この処人家なし、男子を不見、只四箇の女子あり。唐僧不進去、樹林中に避れば、又こゝに三箇の女子ありて踢毬。唐僧見ること久して思ふに、空しく

かへらば徒弟に笑れんことをおもひ、女子に對て【右傍「われは大唐」】云云といふ。三女子笑嘻嘻し、唐僧を將て石室に帰る。冷氣膚を犯すを以、唐僧此処凶多くして吉募しとおもふ。三女唐僧に陪す。外之四女、くりやにありて料理す。皆是人肉人油を以製せしもの、則これを唐僧に薦む。唐僧いかでか箸をだもとるべき、身を起して去去らんとするを、衆女引とゞめ、「たま／＼得たる売買也。やるまじ」と云て、繩をもて唐僧をいましめ、梁に吊あげ、各脱了衣服、唐僧見て「情事を打せんとするにや、さらずはわれをくらふならん」と思ふ。衆女腰眼中より糸繩を多く出し、門戸にいくへともなくかけわたして去了といふ事。(26ウ)

行者等久しく唐僧をまつに帰来らず。そのとき行者妖氣を臨視て、災あらんことを猜し、ひとり彼石室門外に到る。いとをもてからくみたるを見て、そのはかりごとあらんことを怕れて、やぶりて石室に入らず、則咒法をもて土地神を招きよせてよしを問ふ。土地道、「この処盤糸嶺之下に洞あり、盤糸洞といふ。件の七女神通多し。小神力足らざる故に、遁てくはしき事をしらず。南の方三里に濯垢泉あり、七仙女毎日こゝに到て浴す。且つねにはこゝに居住せり。今はその時刻也」といふ。行者、土地を退けて件の浴地に到る。七仙女、果して浴地におもむく。行者蒼蠅と變じて、彼等が身につきて、そのいふよしを聞くに、唐僧をむしてくらふて壽命を延んと云。語言喧嘩、走て橋を過来る。行者思ふやう、云云。浴地上門牆あり、十分壯麗、衆女門をひらき入来る。中間一塘熱水あり、七女脱衣して浴之。その衣裳、かけて衣架上にあり。浴地約五丈あり、濶十丈、内有四尺淺深〔清水〕。池上三間亭子あり。(27ウ)

褪放紐扣児、解開羅帶結。酥胸白似銀、素体渾如雪。肘膊賽凝脂、香肩疑粉捏。  
 肚皮軟又綿、脊背光還潔。膝腕半圍団、金蓮三寸窄。中間一段情、露出風流穴。

行者、衆女を打殺さんと思へども、男子不打女子、且棒をけがさんと思ひかへし、餓老鷹に變じて七套の衣を離去。遂に本所に帰り、八戒・沙僧によしを告。八戒、その門戸の繩糸を不破を手ぬるしとして、鉄鉞を携て、ひとりかし

こに到る。七女、浴池中に在て餓鷹を乱罵す。八戒、七女を見て共に浴せんと云。七女罵阻む。八戒衣服を脱し、池の中に入て鮎魚と交じ、東去西去。七女捉ること不能、八戒本形を顕し衣服を穿、云云と名告り、釘鉞をもつて女子を乱打す。女子等赤条条逃て亭子に到り、繩糸をくりかけて(27ウ)八戒を打たふす。八戒爬けども不脱、睡て地上にあり。七怪女八戒を不傷、各回本洞去、石橋上に站下、真言を念動、那糸繩を取収了、赤条条的入石洞中、对唐僧笑嘻々、石房中の旧衣を取て穿了、直至後門、孩兒等を呼び云云、【右傍「われ等師兄許ゆき去んと云て出てゆく。】  
 原来この七怪女、各乾兒子あり、有名喚做蜜、螞、蠃、斑、蟻、蜂、蜻。乃是みつばち、くまばち、斑、蜻、蜻蜓等の毒虫、はじめ怪女にとられしとき命を乞ひ、乾兒となりて仕んといふにより、ゆるして役使するもの也。怪女、行者・八戒に辱られしよしを【有脱力】「汝等彼悪僧を殺せ」といふ。毒虫等承りて大門のかたに至る。このとき八戒、繩糸の消去たるを歎び、旧ノ処に逃かへりて、よしを行者等に【有脱力】沙僧、「八戒がなまじいなる事をしいだして、師父を傷られん」といふにより、行者沙僧と共に走りて石門上に至る。七毒虫に撞見して問答、八戒も馬を牽て来たる。是かれ鬪戦、毒虫ら身数百となりて(28オ)沙僧・八戒を疊す。行者毛を抜て黄、麻、賊、白、雕、魚、鶴となりて衆虫を撃くらふ。遂に罄尽して跡なし。三人石室に入て見るに、女妖等をらず、やがて唐僧を救ひ打す。唐僧後悔して、「われら餓死するとも、再自専にせじ」といふ。八戒朽松竹を尋て石室を焼了。

第七十三回 情因旧恨生災毒 心主遭魔幸破光

師徒等又西をさしてゆくほどに、一箇の庵観あり、石板に「黄花観」の三字あり。八戒「こゝにて休給へ」といふ。唐僧等四人進去、門上有一对春聯、「黄芽白雪神仙府、瑤草琪花羽士家」。正殿謹閉、廊下一箇道士坐辺有丸薬。唐僧高叫云云。道士驚て薬をかくし、唐僧等を迎る事。

唐僧、三清聖像を念香。道士、仙童を呼て看茶せしむ。おくに（28ウ）七妖女あり、道童茶をくむ時、来たりしたび僧等のもやう問ふ。道童答ていふ、云云。妖女等、これ唐僧師徒なるを猜して、潜に主人を呼しむ。道士、唐僧に辞して、おくに到て七妖女に對面し、「製菓中、且来客によりいまだあはざりし」と云。そのとき妖女等、唐僧并に行者・八戒等が事をつけ、「願くは怨を雪め給はれ」といふ（乾兒子が存否も未詳と云々）。道士聞て大く怒り、「ちからを以勝がたし。家伝のどく薬をすゝめて殺すべし」と云て、楼上より毒薬をとり来る。「此毒、凡人に一下のましまれば即死す。道仙僧僧もの、神通あるものも、即坐に仆れて三日の内に死す。これを茶に加へてのましましし合せ、衣服を更て廊下に至り、唐僧等に無礼をわび、且本国を問ふ。唐僧答て、「東土大唐」云云。道士、これ三藏等なることをしりて、「再茶を見よ」といふ。道童毒を入れしに、四碗の茶に十二ヶの大棗をもて来て師徒にすゝむ。行者は茶をのまず、道士にも「大棗を喫し給へ」といふ。「貧貧観観不時の事にて余分なし」と云て辞す。（29オ）八戒のかたち大きなをもて、大徒弟ならんと猜し、妖女等渠が茶碗へ毒を多く入れ、行者には第四ばんの茶碗を宛て毒を少し入たり。八戒はのんどかはくに、はやく茶をのみ棗をくらひつくしぬ。唐僧・沙僧も、のむとひとしく口中より泡を吐て皆倒る。行者これ毒也と知て、道士を罵り打てかゝる。其時七妖女出て「われらにまかせ給へ」と云て、各いとをなげかけて行者をかけとゞむ。行者このいとにからまれて大に驚き、はやく身を脱して去る事。

一 行者再思案して、毛を抜て六人の行者【右傍「六本の鉄棒」】をつくり出し、その身とゞも七人、更に黄花観に至て七妖女と戦ふ。七妖女、敵の多きを以、いとを合せて投かくることかなはず、道士の資を乞ふ。道士不出、「われ唐僧を食んと欲す。なんぢらを援るにいとまなし」といふ。七妖女、遂に行者に打殺さる。その死骸を見れば、老大の蜘蛛【右傍「精」】也。行者又進去て道士とたゝかふ。道士うけ太刀になり、道士開衣帯、両脇下に一千の隻眼ありて（29ウ）金光を放つ。行者この金光に射られて戦ふこと不能。逃去ること十里にして、金光方止む。唐僧を救ひ



がたきことを歎く折から、一婦人哭しつゝ来たる。行者その故を尋れば、「わが夫、黄花観主と竹竿を争ふて毒殺せらる。われこの故に歎く」といふ。行者も【右傍「又」】泣く。婦人怪てよしを問。行者、唐僧并に徒弟等の事をつぐ。且彼道士、脇下の千眼金光を放によつて、敵しがたき事を告ぐ。婦人道、「彼を征する神あり。但道遠くして時の間に不合」といふ。行者、「法术をもて速にゆかん」と云。婦人道、「こゝより一千里紫雲山あり、山中千花洞あり。洞中毘藍婆あり、これを頼まば道士を退治せん」と云て、彼婦人不見。原来是黎山老姆也。雲中より謝して道、云云。行者謝して雲に乗り、紫雲山に至り、毘藍婆をたのむ。毘藍婆、三百よねん洞中を不出を以辞す。行者しばゝ乞。遂に行者と、もに黄観洞に到る。衣領の中より绣花針をとり出し、空を臨て抛去。行者観内に(30才)入て見れば、道士胸をさゝれて不動。行者うち殺さんとす。道士わびて、「われに解毒の葉、師徒にのましめば恙なかるべし」と云。則この解毒剤を用るに、唐僧師徒三人、口中よりおびたゞしく毒を吐て甦生せり。毘藍婆、道士の命乞して、わが門を守らせんと云。於是、道士本形を顕して大蜈蚣となりぬ。唐僧等称謝。毘藍婆、蜈蚣を従て千花洞に帰去。行者道、「老姆々是母鶏、その兒子是日昴星官。われおもふに、是隻公鶏」云云。遂に火を把て焼庵観成灰燼。却放歩長行。

第七十四回 長庚伝報魔頭悪【「狼」カ】行者施為変化能

話表、三蔵師徒們打開窓網、跳情牢、放馬西行、二云云。

時に孟秋、忽高山を見る。山峰空を（マ）一老者拐杖を持て站立、山坡上に在て高叫、「西行長老暫住。この山許多の妖有て人を(30ウ)を食ふ、閻浮世の人前べからず」と云。三蔵大驚て馬よりをり、よしを問んと欲す。行者ゆかんと乞ふ。唐僧、そのかたちの醜陋なるによつて云云。行者、八九才の小和尚と変じて坡下【「に」脱カ】至り、老者に

謁してよしを問ふ。「われは是大唐」云云。老者、行者のとし七八才ならんといふ。行者笑て「万年不<sub>レ</sub>足す」と云。老者、彼妖の神通を称揚す。行者わらつて不怕。老公、依之くはしく不告。行者帰来て云云。唐僧、又八戒を遣して山の名を問しむ。老者道、「この山八百里獅駝嶺、中間獅駝洞あり。洞中三ヶの魔頭あり」。八戒道、「三魔頭、わが徒三人、一人づゝこれを殺さん」と云。老者道、「彼魔頭四万八千の眷属あり」といふ。八戒これに怕て、帰来て分散せんと云。行者笑て唐僧をはげまし、馬を追て登りゆく時老者を不見、半空中太白金星【右傍「あり」】、行者その小名を呼て李長庚云云。金星慌忙、「大聖不礼をゆるせ。実に用心堅固ならずは災あらん」と云て飛去。依之、行者唐僧をその辺に住め、八戒・沙僧に守らしめ、ひとり魔所をたづねてゆく事。(31才)

一 行者ゆくとき一小妖あり、一桿令字旗を掲着し、腰に鈴をかけ手に柳を敲き、従北向南而走。一丈二尺身子あり。行者暗笑て、「此妖公文の使か。殺して奪取らん」と思ふものから、尚子細をしらん為に蒼蠅に変じ、彼が身につきてそのいふよしを聞くに、小妖独言して、「われら巡山の妖人、孫行者を隄防す」といふ。行者聞て、わが名を知たるを怪しみ、「これ一人は殺すとも、四万八千の小妖あらば益なし。彼三魔頭、いかなる本事かある。探知らん」と思ひかへしてやり過し、その身も小妖と同じかたちに変じ、跡よりよびかくれば、小妖驚て、「何処より来つるものぞ」と問ふ。行者答て、「われも和ぬしらの同役也」といふ。小妖不信、「わが同役四十人あり、汝をしらず」と云。行者云、「われはもと焼火的なりしを、此度大王とりたて給ひて巡山的になし給へり」といふ。小妖聞て、「しからは牌兒あるべし、見せよ」と云。行者道、「われに牌あり、汝もありや」と云。小妖「牌あり」と出して見する。行者道、「わが牌も見せんに(31ウ)まづあるけ」と云てやり過し、毛を抜て牌に変ず。彼牌の背に「威鎮諸魔」的金字あり、正面に「小鑽風」の三字あり。行者そのごとくにして「小鑽風」を「総鑽風」とす。小妖見て、「われら小鑽風なるに、汝総鑽風ならば、われらが支配也」と云。行者道、「汝等おこたることもあらんかと、大王われを総鑽風

としてたゞさしめ給ふ。每人五兩の金子を出せ」といふ。小妖「なかまをとりあつめてまゐらせん」と云、先に進み、行者後に跟てはなしをしつゝ、小鑽風等が会所に至る。行者又衆人に対して云云、三魔頭の本事をしらん為に偽て云、「この中に孫行者変じてあらんもしれず。汝等真の小鑽風ならば、三大王の本事を称揚してわれに聞せよ。その事たがはずは、真の鑽風とせん」といふ。

一 行者高坐にありて質問。一小妖道、「我大王神通広大、本事高強。一日曾吞十万天兵」。行者道、云云。「むかし王母娘々蟠桃会、わが大王を不招。大王欲争、玉皇十万の兵を遣して討しむ。大王変、口を開ば(32才)城門に似たり。以力吞去、天兵不敢交鋒、関了南天門、これ一口曾十万の兵を吞にあらすや」(一大王要大能撑天堂、要小就如菓子云云)。行者道、「二大王奈何」。一個云、「二大王身高三丈、美人身、匾担牙、与人争、只鼻を以捲去。就是鉄背銅身也」。行者道、云云。

又一个道、「我三大王宝贝あり、喚做陰陽二氣瓶。もしこれ人を取て装て在瓶中、一時三刻、化為血」。行者驚道、云云。

二大王与一大王久しく獅駝嶺洞、三大王不在這里、他原住処离此西下有四百里。那廂在座城、喚做獅駝国。他五百年前吃了這城国王及文武官僚、滿城大小男女奪了他江山。ちかごろ唐僧渡天云云。要吃、只他が徒弟孫行者神通広大、十分利害、よりにて兩國の大王と結為兄弟、合意同心、孫行者を退治して唐僧を吃んと欲す。依之、使我們巡山、孫行者の消息を探しむ。是実説云云。(32ウ)

行者道、「汝等すべて疑しきことなし。我見大王回話去」と云て、那先来巡山の小鑽風と共に出て走る。中途この小鑽風を打殺して肉餅となし、その身小鑽風に変じて牌兒と令字旗を取て身につけ、腰間鈴をかけ、手に柳をもち、すべて変じ畢、徑尋洞府、打探那三個老妖の虚実。只人馬の声を聞く。原来是、獅駝洞第一門に入る小妖多くありて道、

「小鑽風来了」と道ふ。行者会釈して進て第二門に入る。この処にをる小妖尤多し。行者を呼とゞめて、孫行者の消息を問ふ。行者称揚孫行者、「身高三丈、神通広大、【右傍「一条鉄棒」】云云。かの石崖にあり。水磨就有十万妖精あり。我三箇大王を打殺して、その首をもて祭んと欲す。因て先你等を殺さんといへり」。群妖聞て大に驚き、魂散魄飛。行者道、「那唐僧の肉、汝等十万の口へ入るべきにあらず。不如、孫行者の来らざる先にはやく逃亡して禍を避よ」といふ。群妖都道、「説得是」。みな逃亡了。たとへば聖化の（33オ）軍民人等、聖化に服して死するとも去らざるとおなじからず。原是狼虫虎豹、走獸飛禽の妖精、呼的一声、都闕然而去了。這個却就如楚歌声吹散了八千兵。行者暗自喜放心、進洞裡去。

第七十五回 【▼回目脱。「心猿鑽透陰陽竅 魔王還帰大道真」】

却説、大聖進て獅駝洞口に至り、又行こと七八里、纔到三層門裏、正面高坐三個老妖、十分瘴惡。両下列着百千大小頭目、威風凛々、殺氣騰々。行者見了、些も不怕、把鈴柁朝上叫声「大王」。三個老魔笑嘻嘻、「小鑽風来了」。行者道「来了」。老魔道、「孫行者の打聴如何」。行者称揚初のごとし。云云。

老魔聞て渾身汗流る。このとき、門外の小妖逃亡の訴あり。老魔その故を問ふ。那孫行者の威風を聞て、怕れて逃亡すといふ。老魔ますく驚て、「如此なる、唐僧の肉を喫せんことは莫想」といふ。

行者道、「那孫行者神変無尽。その身を蒼蠅に變じてこの洞裏に入り、大王を害せんといひし」といふ。（33ウ）

一 老魔驚て道、「幸にわが洞裡蒼蠅なし。もしこれ蠅（ママ）を打殺せと云。行者かれらを嚇さん為に、窃に毛を抜て蒼蠅となして席上に放つ。衆皆これを見て大驚き、「孫行者来れり」と云て打殺さんとして、立て悶扱す。行者不忍、大に笑ふ。行者の变化笑ふに不宜、笑中臉面忽本形を露し出す。第三魔すばやく見て大に驚き、「この小鑽風はにせ

もの也。はやくとらへよ」といふ。衆皆行者を引たふして綁了。事急にして、行者遂に綁らる。於是、孫行者小鑽風を殺して、かのすがたに爰じ来れること発露、三個の老魔飲びの酒宴あり。行者の逃れ去らんことを怕れて、かの瓶をとり来してかれを装着。三十六人の小妖、件の瓶を擲来る。この瓶二尺四寸、陰陽二氣の宝内に七宝八卦廿四氣、三十六人は天罡の數也。行者の繩を解て瓶に容れ、仙氣を吹て蓋し了。大小群妖賞賀。

一 この瓶の内冷氣あり。行者内に在て云云言語す。この瓶、人内に在てもものいふときは火起る。如今行者これをしらず、その冷氣を笑て(34オ) 独語せしより、瓶中猛火起る。幸に行者避火の訣を捻着して不出。然れども出ること不能。ひとり焦燥し且歎く。遂に毫毛を抜て、變じて做金鋼鑽、一根變作竹片、一根作綿繩。拔張箠片弓児、瓶底を穿て小孔をあけ、その身を蟻蟻虫に變じて、その孔中よりのがれ出。三個の老妖、行者の化したらんと云て、蓋を開て見せしむ。三十六個の小妖これを見るに、行者内にあらず、大に驚て瓶輕し、云云。老魔云云、見るとき果して行者内にあらず。失守大驚、行者本相を顯して老妖を罵る。老魔弥驚て、且問答。「われ汝が師父をとらへず、汝却てわが小妖を殺せり」。行者道、「汝等わが師父をくらはんとはかる。依之、われ預来て【右傍「屍」防す」と云。衆皆撃んとす。行者雲に駕して飛去る。

一 行者本所にかへりて唐僧によしをつけ、「われ一人にては事足らず。八戒も共に来れ」と云て相伴す。再び獅駝洞に到て戦を挑む。第一の老魔衆妖を將て、出て行者と戦ふ。八戒後方にあるを見て、「助勢すること(34ウ) なかれ」と云て、戦ひ二三十合に及て、老魔ちから衰て敵することかなはず、則逃去。八戒釘耙を把て追之。老魔口を開て吞んとす。八戒おそれて、逃て草中に伏す。そのひまに行者追来る。老魔又口を開て吞之。行者吞れて老魔の腹中にあり。老魔勝を得て洞裏に帰る。

一 八戒、本所にかへりて、行者の老魔に吞れし事を唐僧に告て、且「師兄明朝は尿となりて、老魔の肛門より出ん」

と云てなげく。唐僧聞て且驚き、且かなしむ。八戒、沙僧にすゝめて、「これよりおのゝ故郷にかへるべし。馬をば売て師父の棺材に充ん」といふ。唐僧いよくもだへなげく。

一 老魔洞中にかへりて、孫行者を吞しよしをいふ。行者、老魔の腹中に在て大に罵る。小妖聞て告之。老魔「些の塩湯以吞下さん」と云て、湯を吞ともかひなし。行者弥のゝしる。又「薬酒を飲ば化せん」と云て薬酒をのむ。行者道「雑碎の事、本文まへに抄録す」云云。咽的接吃了二鐘薬酒。つひに酒に酔て腹中にておどる。那老妖、腹中疼痛不得忍、倒在地下、不知活活【「死活」の誤】。(35才)

一 これより先に、老魔塩湯を吞ともかひなきにより、「一年断食せん、孫行者餓死せん」といふ。大聖道、「我兒子、你不知事。老孫保唐僧取經、從広裡過、帶了個摺盪鍋兒、進來煮雜碎吃。将你裏边的肝腸肚肺細々兒受用、還勾盤纏到清明哩」。那二魔大驚道、「哥哥這猴子、他幹得出来」。三魔道、「哥哥吃了雜碎也罷。不知在那里支鍋」。行者道、「三叉骨上好支鍋」。三魔道、「不好了。仮若支起鍋燒動、火烟燭到鼻孔裏、可不打噴嚏麼」。行者笑道、「没事。等老孫把金箍棒、往頂門裏一擲々個窟窿。一則当天窓、二来当烟洞」。老魔聽了云云。「これより薬酒をのむ事に至る。不知死活如何。且聽下回分解」

右七十五回（35ウ）

第九回（この段古板になし。巾箱本にあり） 陳光蕊赴任逢災 江流僧復讐報本

唐太宗皇帝登基、改元貞観、已登極十三年、歲在己巳、天下太平、八方進方【「進貢」の誤カ】、云云。丞相魏徵、古法に依て開立選場して、賢士を招て採用せんと請ふ事。

この榜行、海州地方に到る。陳粵表字光蕊、母親【右傍「張氏」】に告げて赴長安、入選場、廷試三策、唐王御筆状

元。この時丞相殷開山一女あり、名は温嬌、打毬の折、光蓋樓下を過る。その毬翳てその烏帽子を打。婢妾引とゞめて婚を成す。丞相夫婦即時に出堂、婚礼を行ふ事。

光蓋江州の州主となる。殷温嬌を携て任に赴く。先海州に(36才)立よりて、母親張氏を伴ひ、ゆくこと数日にして、万花店劉小二が家に投宿す。この夜、張氏身体不例染病。次の日、一人鯉をうるものあり、陳光蓋母に喫せしめんとて買之。その鯉蛇魚の眼あり、「是等閑の物にあらず」と云て、遂に江に放しむ。この魚、江州にて漁せられしならん。江州こゝを去ること十五里云云。三日にして母の病不瘥、任限におくれんことをおそれて、母氏「小屋を僦賃して養生せん。汝夫婦ははやく江州へゆけ」と云。光蓋従之、劉二家と談じて、小屋をかり得て盤纏を遺しおき、遂に任に赴く事。

件の夫婦到江渡。このとき稍水劉洪・李彪二人相謀て、その夜先光蓋の従者を殺し、且光蓋を海に投ず。温嬌悲て入水せんとするを不允、「われにしたがへ」といふ。このとき温嬌、既に有身せり。已ことを得諾之。劉洪則行李を李彪にとらせ、己は殷氏を携歸。(36ウ)

一 このとき巡海夜叉、陳光蓋の尸骸を見て龍王に訴ふ。この龍王は、光蓋に放されたる鯉是也。「わが恩人也、甦死せしむべし」と云て、夜叉を冥府へ遣して、その魂を返し甦生せしめ、「時を待て本土に帰すべし」といふ。養ひおく事。

一 海賊劉洪、陳光蓋といつはり、温嬌を帯て江州に到て任につく。人そのいつはりをしるものなし。一日、劉洪公事に依て遠く出。この日温嬌、分婉して男児を生下す。これ光蓋の遺腹也。劉洪かへりてしらは、その児を殺さんことをおそれて、窃に父母の姓名年月をしるし、海辺にも出て、板子にのせてその児を流す。劉洪帰来て、分婉の事をしりて詰之、温嬌云々と報る事。

一 この児流れて金山寺の脚下に到り止り、金山寺の長老【右傍「法」】明和尚、小児の啼哭の声を聞いて心動く。則と  
りあげしめて人をして養しめ、乳名を江流と名づく。江流十八才に及て剃髮修行、名を玄奘と呼なす。一日、玄奘そ  
の父母姓氏をしらざるをもて歎く。法明和尚、則血書の(37才)一通を出して玄奘に示す。玄奘則江州城に至て母を  
訪んと乞ふ、遂に赴く。このとき劉洪、公事によりて遠く出て未帰、母子相抱て泣く。温嬌則光蓋の横死、并に劉洪  
の悪事を報知、「長安に到てこれらのよしを訴て仇をかへせ」と云て、殷丞相の事を告しらせ、「老母へ書簡をした、  
めてまゐらせん」といふ事。

一 玄奘、はやく金山寺へ帰て長老に報知、いくばくもなく劉洪帰る。温嬌則念願の事に托し、僧鞋百隻を金山寺へ施  
行せんと乞ふ。劉洪、則百姓に課せて件の草鞋をとりよせ、温嬌を金山寺へ遣す。温嬌則長老と玄奘に対面、密談し  
果て、かのふみを玄奘にわたし、又「万花店に到て祖母を訪へ」と云て、ふみをわたしして府城に帰る事。

一 玄奘、法明和尚に辞しわかれて長安に赴くとき、先万花店に到て祖母張氏を訪ふ。張氏零落、盲目となりて人の為  
に田の鳥を追ふ。玄奘尋あふて母の文をわたし、且父母の事を告ぐ。張氏かなしみに堪ず。玄奘も哀て仏陀を念じ、  
祖母の目を舐るに、その眼忽明になりて、物を見ることはじめのごとし。玄奘遂に祖母にわかれ、長安に到り殷丞相  
夫妻に(37才)云云と訴て、母のふみを奉る。殷丞相聞見て且驚き且怒て、光蓋の横死、劉洪等が悪事を太宗に訴ふ。  
太宗怒て六万の兵を殷丞相に授て、劉洪・李彪を捕しむ。丞相則玄奘を將て江州江州に到り、劉洪を誅伐し、且李彪を  
もたらへて誅之。温嬌恥て自殺せんとせしを、玄奘と丞相とねんごろに禁之、遂に江辺に出て陳光蓋を祭る。このと  
き龍王、巡海夜叉をして、光蓋を擡げて江口に送出しむ。衆皆光蓋の尸骸を見て驚く。於是、光蓋甦生、衆皆歛び且  
あやしむ。光蓋、則龍王の恩によりて云云と告て、殷丞相遂に光蓋・温嬌・玄奘を將て長安に帰城し、件の事の趣を  
太宗に訴ふ。太宗驚嘆、則陳光蓋を学士の職とす。則母親張氏を迎て孝養す。玄奘立意安禪、送在洪福寺内修行。後



来殷小姐畢竟從容自尽。佞瑛自到金山寺中、報答法明長老。不知後來事体若何、且听下回分解。(38才)

この篇、悟一子が評に資て称揚して云云、乃欲顕発書中之妙、使人人確知其為神仙之書之妙、而無不為神仙、不更難乎。如此篇、読者謂、不過叙述唐僧履歴已耳、無甚意味。且事跡矛盾、於世法俗情、亦多未洽、難可信拠。如高結彩樓、抛毬、卜婿、婚礼、所不載。状元之母何至單身僑寓。宰相之女、寧乏護送赴官。州牧夫人、斷難私到江干【干】の誤。片板作筏、亦非保赤善策。抛毬之愛女、何一去不相往來。現官之慈蘭、何別後遂成乞丐。即日【日】の誤。官拘資格、必無一十八年不調。雖云親故疎稀、豈無一二瓜葛問問。尋親認母、何能徑入内衙、直吐肝膈。豈斗大之州、署冷官寒、不設閹人之啓閉、終鮮臧獲青衣之在側邪。及事敗成擒、又何以(38ウ)統兵六万之多乎。種々不經、読者厭聽。前人輒將此篇刪斥以為可。有可無。噫仙師學貫古今、胸羅造化熟諳世態人情、典章矩矱、豈肯此【下此】の誤。疏漏之筆。不知仙師寓意立言之高妙、正在于此、云云。

庚寅閏三月廿九日午牌抄録了(39才)

《解題付記》

今回紹介した、『西遊記』第四十七〜四十九回の梗概は、『南総里見八犬伝』第八輯下帙(天保四年正月刊)における、大の鷲蟬坊退治(第八十六・七回)に類似する。特に妖賊退治ののち、鷲蟬坊らに住み家を奪われていた真猫が、大に恩を謝する筋立ては、「金魚に水第を奪れたる大龜」(『西遊記抄録』二十一丁裏)が、報恩のために三蔵一行を乗せて通天河を渡る一件から想を得たのではあるまいか。馬琴が、大の活躍を執筆したのは、天保三年の三月から翌月にかけてのことであり、『西遊真詮』の披閱・抄録は、その二年前に行われたものである。

## 付、『金毘羅船利生續』馬琴自序

## 《凡例》

- ・ 本文は慶應義塾図書館蔵本による。虫損箇所等については、早稲田大学図書館蔵本などを参照した。
- ・ 漢字は通行の字体に改め、一部の傍訓を省略した。また、仮名には適宜濁点を補った。
- ・ 割注は〔 〕に囲み一行で示した。左側に傍訓がある場合は、漢字のあとに【左傍訓】として示した。
- ・ 主として作品の成立事情や原作の中国小説に言及した箇所について、本文の後に略注を掲げた。

## ◆初編自序（一丁表）

虚誕きよたんに異名ひみやうさまざまあり、浮図家うずゑの方便ほうべん、莊氏そうしの寓言うごん、武士の武略ぶりやくに、遊女の手管てくだ、扱商賈さてあひとの空誓文そらせいもん、孰いづれか虚誕しんにあらざりける。虚きよは是実こゝろじつの対たいにして、花はうそなり、実みはまこと、邪説じやく暴行ぼうぎやうなきものを、善巧ぜんぎやうといひ、戯謔ぎげきといふ。神道しんどう眞実まこと、仏語ぶつごは啗々ぶつづ、神釈しんしやく兩部りやうぶの乗合のりあひなる、金毘羅船こんびらふねと題めあてしたる、標識めあては讚州象頭山そうづまへん、鼻はなの先さきなる智恵ちゑの海うみ、面柅おもぢとり取と楫かぢ任まかせると、作者そごが獲手えてに帆ほを揚あげ、思おもひつくゑを友筏ともいかだ、筆ふでに漕こする今昔いまむかし、和漢わかんに渉わたるも少許ちつりるいぬけ類るい拔は、彼天潢かのてんくわうの何侯なにこう王わうの、『西遊記』より故事こじつげ附つて、やうやく物ものに草稿しかがきの、かみ代よのむかし、仏在世ぶつじせ、あられもない事こと、あり貞まに、綴つづりなしたる戯作げさくも勸懲くわんちやう、まことから出でたうそじやとは、神かみも照覽せうらん、仏ぶつは見みどほし、身みすぎ世よすぎとおゆるしを、かうもり羽織はせりの裏うらをゆく、鶴つるの脛はざなる長物語ながものがたりの、今茲ことし初編しよへんの序ことばびらきから、追々おひくづき接木つぎぎの花はなの春はる、幾編いくへん続つづく歟や、其処そこまでは、考かんがへは、果はたしなきものから、千世ちよに八千世やちよをかけ向まは、かしこみく敬うやまつて序つづす。

文政七年甲申春正月新版

曲亭馬琴述

印

（乾坤一草亭図）

《注》

◇天潢の何侯王↓この作者説は、明刊本『西遊記』の陳元之に基づく。原文には、「或曰<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>今天潢何侯王之国<sub>一</sub>、或曰<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>八公之徒<sub>一</sub>、或曰<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>王自製<sub>一</sub>とある。「今天潢」は「明の宗室」、「何侯王」は「何とかいう侯王」の意とされるが（太田辰夫氏『西遊記の研究』二三九頁。昭和59年、研文出版）、これを馬琴が正しく理解していたとは思われない。本稿解題参照。

《初編概要》

六卷二冊。文政七年刊。原作の第五回に至る。下冊の前表紙見返しに掲げられた以下の文章も、馬琴の手になるものであろう。

神釈恠談両部の趣向は、狂言綺語とまうせども、思ひつき地の善巧方便。硯の海に帆を揚げし、作者画工が乗合に、お蔭を蒙る板元迄、ずつしり蔵へ入船を、祈る甲斐ある利生の纜。二編三編遅滞なく、毎年出版可仕候。御信仰の御方は、多少によらず、御評判御求之程、奉希候。已上 板元 芝神明前 和泉屋市兵衛

また第二編第一冊の前表紙見返しには、初編の梗概が掲げられている。

初編は岩拆の神、方便山なる金幣石の中より化生て、意如天堂に眷属を集合、更に仙術に游学して、還て冥府龍宮に威力を顯し、日神に仕まつりて、蟹守となり、後竟に、意如神尊の爵を賜て、大社の新嘗会に、御酒桑を私せしことに終れり。未初編を繙き給はぬ、閨秀郎君子もをはしまさば、初より後々まで、徴給はんことを冀ふのみ。

願主板元 芝神明前 甘泉堂敬白

## ◆第二編自序（一丁表）

むかし浅井氏の『御伽婢子』は、『剪燈新話』を綴りかえて聊も唐臭きことをまじえず。本書をしらぬ看官は論なし、和漢の神史を好るものは、これを作者の働きとす。この草紙も亦似たることあり。趣向は『西遊記』に縁るといふとも、彼小説と同じからぬ、著述の苦心を誰か知らん。もし豆眼をもて観るときは、只是兒戲の冊子のみ。千早振る神、言左弊俱、仏を弄ぶとやいふべからん。又よく有漏を見透すものは、狂ひながらも成仏すといふ、踊念仏の類とやせん。そはとまれかくもあれ、乗かゝつては今更に、ひくにひかれぬ金毘羅船、又初編から読かへて、二編三編幾編となく、漕著るまで御覧じろ。終には到る彼岸の、浅井に類せる趣向でも、人手は借らぬ硯の海に、深い意のあら波よけは、港歇の日和癖、作者も癖じやが、のらつかで、なほ又歳々、精を出すべし。

文政八年乙酉春正月吉日新刻

曲亭馬琴識

印

（乾坤一草亭図）

## 《注》

◇浅井氏の『御伽婢子』は、↓浅井了意『伽婢子』は、寛文六年（一六六六）刊。

◇『剪燈新話』↓瞿佑作。現存するのは四卷二十一話。了意が参照したのは『剪燈新話句解』とされており、新日本古典文学大系『伽婢子』（平成13年、岩波書店）の巻末には、『句解』の慶安元年刊本が影印されている。

## 《第二編概要》

六卷三冊。文政八年刊。原作の第九回に至る。ただし、三蔵法師に相当する浄蔵法師と、その父三好清行の物語は、菅原道真の伝承に附会され、原作を大きく逸脱している。

第三編第一冊の前表紙見返しには、以下のごとき第二編の梗概が掲げられる。

嚮に著せし第二編は、石拆の意如神尊、月弓宮に甘露酒を私せしことに起り、日本武の神力により、衆神石拆を搦捕て凱陣し、更に両部宮の湯立釜に、石拆を走せしとき、仏祖如来の妙智力をもて、両界山に石拆を圧鎮ることに中し、これより人間世に迨て、三善清行が事、淨藏法師の出家の事、出雲なる大社にて、諸神媮結の事、淨藏越の角鹿にて、細江水之助と小鮮媛の情死を拯ひ、そのち太郎孺・乙孺を養ふ事、并に胆吹の老狐、湖水の龍王が、清行を謀ることに終れり。初編・二編を閲せざれば、此編の事、会得しがたし。毎編必次第を追ふて、求め給はんことを祈るといふ。

◆第三編自序(一二丁表)

天朝いにしへより渡天の僧なし、しかるも近世渡天の作あり。むかしく三河前司大江定基、祝髮入道して、法名を寂昭といふ。且その道徳碩学のみり、天台座主に補せられて、三千の僧録たり。尔后宋の天台山を、眼前見まくほしとて、渡海して彼土に至れり。然るを能楽石橋の一曲に、又云と綴り易て、天竺清凉山に登りし事とす。今この冊子に著したる、淨藏法師の渡天の事も、石橋曲の類と見るべし。嗜華胥南柯、無稽の言、理外の境に遊びつゝ、夢の浮橋、柘を数へて、事迹の有無を論ずるものは、柱に膠するに似たり。将唐山の小説を、皇国の事に作り更るに、彼と此とは物みな異也。されば本書にからまれて、作意に自由を得がたきを、辛して綴りたる、作者の苦心は十分なるも、看官は二分三分ならんを、をさく時好にあはせんことは、勞して功なきわざながら、鑢して利あらん書肆の為に、亦いはでものことをいふのみ。丙戌孟春 曲亭馬琴きまじめに述

印(曲)印(亭)

## 《注》

◇能楽石橋↓五番目物。世阿弥または元雅の作とされる。寂昭の入宋に取材する。

◇丙戌孟春↓「丙戌（文政九年）」は、入木訂正。一方、第二・三冊の前表紙見返しには「文政八稔乙酉統出」とあり、おそらくは第二編とともに前年（実際には文政七年中）の刊行を目指していたのであろう。

## 《第三編概要》

六卷三冊。文政九年刊。原作の第十二回に至る。

## ◆第四編自序（一丁表）

世に万物の生出るや、愚なるあり賢あり、清あり濁あり。そが中に、天地と父母と和合して、いと清しとも浄かりける、正気を稟て生るゝものは、その五臓も亦清浄し。五臓の清く浄かるものは、睿明にして命長く、生ながらにして知り、死して亡びず。便これを神と称へ、仏と唱へ聖人といひ、又その亞を賢者といふめり。尔らば浄蔵は、是一人の名にして、一人の名にあらず。神仏聖賢おしなべて、皆浄蔵といはまくのみ。しかはあれども、賢愚清濁是同根、仏も邪魔も一体真如、彼百怪は虚名にして、正覚も亦本来空、迷なければ悟もなく、無仏世界に外道あらず。かくまでいふても知れがたくは、適て無何有の郷人に問ふべし。

文政十丁亥年春正月吉日新版 曲亭馬琴自叙

印

（乾坤一草亭図）

《第四編概要》

六卷三冊。文政十年刊。原作の第十七回に至る。三月までに六千部を売る（三月二日付殿村篠斎宛書翰）。前表紙の見返しには、各冊の概要が掲げられている。

○第一冊 渡天の発帆

○第二冊 虎穴の陀 勇部の宿

○第三冊 両界山 六剪徑

○第四冊 緊頭呪 鷹愁澗の龍馬

○第五冊 鞍掛の冥助 観音院の鬨袈裟

○第六冊 黒風洞の仙丹

◆第五編自序（二丁表）

この書の初に見したる、日の神伽毘羅坊を征し難給ひ、遂に釈迦如来の手を借て、両界山なる五行峰に、謫罰せしめ給ひし事、是則『西遊記』に、天帝孫悟空を征しかねて、云云の事の如し。それを只文に就て見れば、神徳還て仏力に、及ざるものに似たり。作者の本意は、豈然らんや。夫日の神の至仁大徳、前に対なく後に敵なし。この故に、みづから伽毘羅を征し給はず、釈尊これを征するときは、君臣佐使の義分明也。かくて又釈迦如来も、みづから伽毘羅を濟度せず、観音大士に度せしめて、浄蔵渡天の資としも、なし給ふ段に至りて、独観音の妙智力、釈尊にも優れる如し。豈然らんやしからんや。君臣佐使はその功一なり。然りといへども君位に在るもの、をさくその功德を統。これ大仁は仁なき如く、大徳は徳なきに似たり。看官君らで甲乙あり、と思ふて難ずるは惑ひのみ。本編書肆に故ありて、去歳は製本延引せり。今茲は六編共侶に、売出すといふ板元の、好に半頁、綴易て序す。

文政十二年己丑春正月吉日新販 曲亭馬琴識 印（乾坤一草亭図）

## 《注》

◇書肆に故ありて、↓文政十年十一月二十七日の板元類焼ゆえに、本編の刊行は一年延引した。

## 《第五編概要》

六卷三冊。文政十二年刊。原作の第二十三回に至る。文政十年閏六月十二日頃起筆、七月二十八日擱筆。執筆中に馬琴は病み（閏六月十七日～八月七日）、快癒後に笠翁の号を篁民と改めた。本編の末尾にも、「作者病後のことにあれば、保養の為にいとまなし」（二十丁裏）とある。

第一冊の前表紙見返しには、本編の概要が述べられている。

舟服くさのみぬき衣る胡国えぞのくにも、あから引わが日の皇国ひのみくにの、手ぶりを慕ふ土師村落はじに、太郎官たろうわんが壻むこがねの、はじめは渠かが力ちからによりて、発跡はつせきし身を愁なごに、果は疎はなみて憚はぢの、修験しゆげん者乞この禱事のりごとも、甲斐かいなき閨ひなの物の怪ひげは、羽悟うりご了りやう八戒はちがい発心はつしん 濫觴らんさう

雑魚ぞこと伴龍ともりゆう宮みやも、八百日やひやくゆく龍沙河りゆうまがは、彼岸ひがんに遠とほき煩惱ぼんごう界かいに、鬪たたか骸がい船せんの妙智めうち力ちから はじめは人を鳥とり自物じぶつ、犛くさ生せいし 身にしあれど、果はつどふて睡ひるましく、渡天わた徒者とどの願事ねんごとも、冥加めい加ある瀬せの妖怪やかいは、沙しや和尚せうしやう鶴悟かくご定じやう道心だうしん 因縁いんえん

## ◆第六編自序（前表紙見返し・一丁表）

金毘羅船利生きんぴらせんりしやう 纒つむ 第六編序だいろくへんの

西域せいよく 积厄せきやく 伝でん  
東方とうほう 翻案ばんあん 作さく

每編やま八卷はつばん合本がっほん 上帙じやうし 各おの 二冊にさふ  
下帙げし 各おの

明みやうの謝肇淛しゃちやうせき、古今ここんの稗史はいしを評論へんろんして、『西遊記』をもて第一とす。初はじめて彼意匠いじやうをなせしもの、書しよは既すでに五車ごしやに富とみて、



且易学説相、仏経道書の諸宗旨を看破り、才は宛二西に過て、将司馬・斑史を屑とせず、実に小説家の巨擘【左傍訓「○オヤユビ」】にして、先に敵なく、后に対なし。こゝをもて土君子の、為にしも退棄られず、『水滸』と俱に並馳て、今に至て盛なり。然れども『水滸伝』は、よく人情を柄鑿して、写して人の性の善悪を尽したり。又『西遊記』は百怪千妖、変化の不測を旨として、彼情態を写すこと罕也。故を以て世評は、『水滸』に不及とするものあり。是等の人は『西遊記』を、よく視るものとすべからず。予も亦謝氏に同意して、彼書に因て此書を著し、浄蔵渡天の无根草を、植栽することこゝに年あり。大凡此の如き冊子は、看官識易くして、作者に倣回き所あり。其をいかにぞと推すときは、初編は神代の邈然たる、婦幼に落を取り易からず。扱又第四の編よりして、異邦の人物ならざれば、皆是魔王妖邪の類也。次の巻は、とあけても暮ても、和尚と恠僧のみにして、愛敬色気のなきものなれば、閨秀児童は今さらに、生人を見る如くなるべく、又『西遊記』に熟せる人は、珍しげなきものとやいはん。とやらんかくやあらんかと、案じたるより座に易く、『傾城水滸』と共侶に、世の評判もまんざらならで、第六編まで漕著たる、金毘羅船の利生は觀面、□□□□□□□□、□□運慶、春日の作の古物より、この新作を、と甘泉堂の、好みに任して本編より、毎編八巻四十頁を、上套・下套と二帙にわかちて、上本製の物柄宜く、外題をはるや春袋入り、到底は竹馬の友綱、児童の冊子に物々しげなる、序文も翰て卷丁に述。

文政己丑孟陽新版 曲亭馬琴識 印 (乾坤一草亭図)

《注》

◇西域积厄伝↓本編第四冊の前表紙見返しには、以下の詩が「右記伝巻部提要詩」として掲出されている。

混沌未分天地乱、茫茫渺々無二人見。

自ヨ從<sup>リ</sup>常立破<sup>リ</sup>鴻蒙、開關從<sup>リ</sup>茲清濁弁。  
 覆<sup>コ</sup>載<sup>シ</sup>群生<sup>ヲ</sup>仰<sup>テ</sup>至<sup>レ</sup>仁、発<sup>コ</sup>明<sup>シ</sup>万物<sup>ヲ</sup>皆成<sup>レ</sup>善ト。  
 欲<sup>セバ</sup>知<sup>ラント</sup>造化<sup>元</sup>功<sup>ヲ</sup>、須<sup>ラント</sup>看<sup>ル</sup>西遊<sup>積</sup>厄<sup>ヲ</sup>伝。

これは原作第一回の冒頭から転載されたものであるが、馬琴は原詩第三句の「盤古」を「常立（国常立尊）」に改めている。『利生纜』第四編第三冊の前表紙見返しにも、「造化会元功 西遊積厄伝」とあり、この「西遊積厄伝」は『西遊記』の旧称とされる。馬琴は右序文において、「東方」の語に対応させるべく、「西遊」を「西域」に改めたのであろう。

◇明の謝肇淛↓随筆『玄同放言』第二集（文政三年、仙鶴堂等刊）卷三之下にも、「謝肇淛が小説を論じたる、『西遊記』を第一とすべしといへり」（十八丁裏・十九丁表）とあるが、『五雜俎』等に同趣旨の文章を見出すことはできない。

本稿「解題」参照。

◇書は既に五車に富て↓「書富五車」は、『莊子』天下編に見える語。

◇二酉↓湖南省にある、大酉・小酉の二山。読本『勸善常世物語』（文化三年、柏栄堂等刊）卷一にも、「さる程に虚空蔵丸、人となるに従ひて、文武の道にこころを委ね、弓馬劍法はさら也、経伝兵書に思ひを耽らし、才は二酉に達、書は五車に富」（十六丁裏）と、同様の表現が見える。

◇司馬・斑史↓「司馬」は司馬遷、「班（斑は誤）史」は班固。

◇柄鑿↓「柄鑿」は、ほぞと、ほぞを受ける円い穴。「穿鑿」の誤か。

◇『西遊記』は百怪千妖↓『玄同放言』には、『西遊記』は、尤妙作なれども、その事怪誕に過て、毫も情致を写せることなし。その書、『水滸』、『三国演義』の右に出がたきは、この故なるべし（卷三之下、十九丁裏）とある。

◇无根草↓原本、「无根草」。馬琴は「无(無)」字を「无」と書くことが多い。

◇『傾城水滸』↓文政八年〜天保六年、仙鶴堂刊。文政十二年には、六〜八編が一括して刊行されている。

◇□□□□□□□□↓梵字のため、以下に原本を示す。「曩莫三曼多、縛日羅」な

なむきさまんざつをさうりんげん、  
 不也以此不る四運慶

どと音訳される。続く「運慶」も、梵語「うんげん」(吽欠)の地口であろう。

◇本編より、毎編八巻四十頁を↓地本問屋間で合巻の単位が四冊に統一されたのに伴い、本作も毎編三冊三十丁から四冊四十丁に改められた。詳細は佐藤悟氏「草双紙概略」(『東京大学所蔵草双紙目録』五編所収。平成13年、青裳堂書店)などを参照。

◇上本製の物柄宜く、外題をはるや春袋入り↓本年以降、右の分量増加に伴って、本作の装丁も錦絵表紙から厚表紙・袋入りに改められた。

### 《第六編概要》

八巻四冊。文政十二年刊。前年二月二十二日頃起筆、三月七日擱筆。原作の第三十回に至る。稿本が東洋文庫に現存。本編の梗概は、第三冊の前表紙見返しに掲出されている。

尸魔が和僧に戯るゝ、蛇回山の餉送り、一怪三変の化の皮を、剥頭せし忠をもて、還て非法とせらるゝも、  
 則 仏の方便峰なる、岩拆の威如神尊が、故郷へ飾る山野の錦は、木の葉天狗の韓くれなる

黄袍が蚕王を魅かす、宝象国の虎狩、一身二体の虚草を、塗隠したる妖をもて、更に正人と思へるも、乃鬼  
 の瘤取塚なる、小龍白馬金鱗が、廬樞に帰る御溝の水は、食厨子妙のつるぎの舞

なお、馬琴は本編末尾において、第六編から第七編にわたる「宝象国」の物語(原作第二十八〜三十一回)を、「こ

の黄袍怪の物語は、『西遊記』中にて、「一二を争ふ妙趣向なれども」（四十丁裏）と評している。

◆第七編自序（前表紙見返し・一丁表）

遊姑峯からは是首には、昔よりしてなしといふ、野夫はさら也化物をも、策子で観する江戸の朝勝、彼漢文の蒼表子を、大和錦絵の揚付表子に、綴易るが時好流行、新奇も昔の相場にて、高きに登るに低きよりす。下学上達の資には、なすべきものにあらねども、看るは看ざるに優よしあれば、童蒙這書を繙きて、綱曳・石投・木登の、悪遊戯に易よとなり。抑こゝに見したる、石拆はシテにして、淨藏は即ワキなり。且八戒の悟了たる、悟て又了るも、沙和尚の悟定たる、悟によりて定なり。皆是人の心にあり。定は禪、禪も静、静なるは天の性、動きて変化するときは、無辺無量の邪魔となる。変化既に極れば、魔も亦成仏する時あり。誰かその心上に、一箇の阿弥陀なからんや。觀世音も釈迦如来も、亦是人我心の本来、他を求めずして這身に在り。觀するときは世音通ず。機感円通自在にして、響の物に応ずる如きを、名づけて觀世音といふ。心の常を如来とす。心常なく禪定なければ、終に了悟の時を得難し。迦毘羅の名義は這策子の、第一・第二の編中に見えたり。夫金石の堅固かるも、火をもてこれを攻れば、拆もしつべし、砕くも易かり。かゝれば亦石拆に、修行鍛煉の別義あり。又淨藏の淨藏たる、前にもいへることながら、是心頭の如来にして、迷悟の判る所なり。迷と悟と賢不肖とは、人我五臟の淨かると、淨からざるとにあらんのみ。迷ふものは迷を知らず、悟るものも悟を覚えず、迷悟両ながら忘れて後に、はじめて維摩の室に入るべし。

文政十三年庚寅春正月吉日新版 曲亭馬琴識

印（乾坤一章亭図）

《第七編概要》

八卷四冊。文政十三年（天保元年）刊。前年五月十七日起筆、六月三日擱筆。原作の第三十五回に至る。稿本が東洋文庫に現存。なお、第六・七編の稿本は、岩崎文庫貴重本叢刊近世編6『草双紙』（昭和49年、貴重本刊行会）に影印されている。

第二冊の前表紙見返しに掲出された、本編の梗概は以下の通りである。

黄袍・花羞を和解し、牽牛織女の貸小袖は、七月七日の秋天万里に、星を戴く淨藏法師が、朝立の旅日記  
 金・銀二角を摹擬せし、稻花洞裏の餌薬料は、四僧師弟の百折千磨も、風前なる三灯山鬼が、夜行の枝折草

◆第八編自序（前表紙見返し・一丁表）

『西遊』の一書、幻縁不可思議、原何人の作なるを知らず。陳元之はこれに序して、何侯王の作かといひ、又尤伺もこれに序して、丘長春の作といふ。并にいまだ的否【左傍訓】「○シカルヤイナヤ」をしらず。『元史』には止機伝に処て、もて神仙と称すといふ。尤伺が序にこの義を論じて、言皆『華嚴經』中より、取もて来つといふものは、よくその隱微を發明して、その骨髓を得たるにちかきも、悟一子陳氏が評微りせば、疇か作者を三教の、忠臣としも知るよしあらんや。看官悟らず、読るは稀にて、僉恠談の巨擘【左傍訓】「○オホユビ」としつゝ、相見て噴飯に充るのみ。かくて吾この策子を綴るに、をさく彼書を剽窃摸擬して 皇国の故事に縁るものから、亦画虎類狗の譬に似たれど、婦幼に諭し易かるを旨とす。こを緝くもの思惟よ、今本編に説くところ、道士全真妖術をもて、烏鷄王となること三年、后妃も太子も群臣も、咸相仕へて疑はず、その仮と真とを、知ざりけんは迷ひのみ。玉石【左傍訓】「○マコト、ニセト】一トたび認錯てより、夫婦枕席を俱にせず、母子亦胡越となるに至て、なほ毫ばかりも疑ざりける、凡

慮肉眼りよくがんは然まもあらん。彼号山かのうさまんの魔王まおうの如ごときは、天眼通てんげんつうを得えたるもの也。しかるも父ちちを認まらずして、飯いせものをもて真まこととしつゝ、看破みわづることの遅おそきは何なにぞや。只是ただこれのみにあらずして、又孫行者そんざんぎやうの岩拆いはさきすら、その師しの真偽まひを認まも弁わかで、呪文じゆもんによりて知れるがごとき、神通不測しんつうふそくのものといふとも、做なことあれば、必かならずまよ迷まよふ、その求もとむることある故ゆゑに、皎々けうけうたる個この真如しんじゆの月つきを、心こゝろに失うしなはざるものなし。一切衆生いっせしゆじやう邪魔外道じまがいだう、よく這境堺このまかひを解脫げだつせば、初はじめてて仏子ぶつしといはまくのみ。嗚呼ああ『西遊』の「書意味深長しゆいみしんちやう、字々金玉きんぎよくぎよを和斛わかくたる、原本越げんぽんに四十二回、本集やうやく第八編だいはちへんにも、折々いづ出る觀音くわんおんびらき、扉ひらの半丁はんちやう取入とりいたる、序まにでも切きて作者そしやの本心ほんしん、生地露きぢのあして、述のること恚しかなり。

文政十四年辛卯春正月吉日新版 曲亭馬琴識 印 (乾坤一草亭図)

### 《注》

- ◇陳元之↓明刊本(華陽洞天主人校本)『西遊記』の序者。
- ◇何侯王↓陳元之序に「出今天潢何侯王之國」とある。初編自序の注参照。
- ◇尤侗↓清刊本『西遊真詮』の序者。馬琴は『真詮』を、文政十三年(天保元年)初頭に披閱した。
- ◇丘長春↓一一四八〜一二二七。名は処機、道号は長春子。全真教を開いた王重陽の高弟。旅行記『長春真人西遊記』があり、ために彼を神怪小説『西遊記』の作者とする誤伝が生じた。
- ◇『元史』↓その釈老列伝に、丘処機の伝が見える。「止機伝に処て」は、「丘処機伝」の誤り。
- ◇言皆『華嚴經』中より、取もて来つ↓尤侗序に、「後人有『西遊記』者、殆『華嚴』之外篇也」「記『西遊』者、伝『華嚴』之心法也」などとある。
- ◇悟一子陳氏↓陳士斌。字允生、悟一子と号す。浙江山陰の人。『西遊真詮』の評者。以上、本稿「解題」を参照。

◇烏鷄王↓烏鷄国王は、全真（実は文殊菩薩騎乗の獅子）に殺されて、位を奪われる（第三十七回）。

◇彼号山の魔王↓牛魔王の子・紅孩児。第四十二回で、悟空は牛魔王に化けて、紅孩児を欺こうとする。

《第八編概要》

八巻四冊。天保二年（文政十四年）刊。原作の第四十二回に至る。前年の日記を欠き、稿本も現存しないため、執筆の経過は不明。

（かんだ・まさゆき 法学部准教授）